

国立国語研究所学術情報リポジトリ

談話研究の現状

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2020-06-29 キーワード: 作成者: 西原, 鈴子 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.15084/00002901 |

談話研究の現状

日本語教育センター

西原 鈴子

談話の研究は近年非常に多様な展開をみせている。今年度の発表会も、言語行動研究部、言語教育研究部、日本語教育センターからの発表で構成されており、研究の側面が単一でないことの一つの証明になっている。そのような談話研究の現状を探ることは、複眼的視野に立たない限り不可能なことであろう。

1 談話研究ということの意味

談話を研究の中心にすえることは、音韻、形態素、文というような言語単位から成る論理体系に焦点を当てたことばの見方でなく、言語形式の意味機能や、韻律、文章、会話、演説など、文よりも長いことばのまとまりが伝達行為の手段として展開されるはたらきに注目した観点をとることを意味する。ここでは談話を「文以上の長さを持つことばのレベル」と定義し、話し言葉・書き言葉の区別をせずにしてすべて談話と呼ぶこととする。談話は、個人的・対人的・社会的・教育的・歴史的側面等、ことばのはたらきのどのような側面を切り口とするかに応じてその研究領域も変化する。さらに、談話自体のあり方を観察・記述するにとどまらず、それを研究の資料として理論を構築する、いわば談話をプリズムのように使って他の事象をうかがう研究領域も多い。そのように学際的であり、かつ対象に関してのメタ認識を伴うところに談話研究の醍醐味が存在する。

2 談話研究の「立つ瀬」

学際的であるということは、種々の研究分野を基礎にして、いわばそれぞれの分野のバイアスのかかったかたちで研究が行われているということである。言語関連の分野だけに限って考えても次のような分野に思い至る。

(1) 文法論

きっかり構築された純粋な論理形式としての文法からこぼれおちる事象に注目する「談話文法」という領域である。文法論が「文」の構造を記述することを目的として存在するとすれば、談話文法はその文の使い手の立場や意図が純粋論理体系であるべき文法体系の規則として必須の要因となる部分に注目している。たとえば「やりもらい」の表現は、誰が誰にというものの動きの方向だけでなく、話し手がどのような立場をとるかという「人間くさい」要因が語彙選択のキーになっている。それは「視点 (empathy)」という用語によって他の類似の現象を記述する際にも重要になっている。その他、「とりたて」、文副詞、アスペクト形式とモダリティーの呼応なども純粋な論理形式の枠外の現象であろう。

「文」のつらなりである文章の構造も当然談話研究の対象である。接続形式、段落の構成など、文を越えたまとまりに規則性を見いだそうとする文章論の方向はいわば元祖談話研究の領域であろうか。

(2) 語用論

語用論は、ことばの自己充足的な構造ではなくことばとその使い手の関係に焦点をあてた研究領域である。そこにもいくつかの基本的な観点の流れがある。まず、ことばの意味を発話目的から定義しようとする機能主義の観点がある。ことばの意味を対人関係において規定しようとする発話行為論もこの流れに属する領域である。また、論理式に置き換えられない現象、たとえば照応・指示などに着目する観点もある。運用におけるウラの意味（含意・メタファー等）について考えることも同じ線上の問題である。談話の構成を記述する文脈論と、文脈外の百科事典的知識体系との関係を見ようとする流れもある。そしていわゆる「社会語用論」は社会言語学の流れと語用論的視野の結合による領域である。

(3) コミュニケーション論

語用論があくまでことばとその運用を主たる研究対象とするのに対し、ことばを媒介とする人間関係とその行き違いに注目するのがコミュニケーション論（学）であろう。伝達の目的に注目する領域、メッセージとその伝達過程のモデル化の試み、あるいは伝達手段によってヴァーバル・ノンヴァーバル・コミュニケーションを区別しそれぞれに注目する領域がある。異なる文化が接触することによって起こる現象を捉える異文化コミュニケーション学も存在する。

(4) 社会言語学

ことばの話し手である人間とその集団に注目する研究領域が社会言語学であろう。性、年代、地域、社会階層等によって使われることばの差に注目すること、あるいは特定の社会生活場面でのことばのやりとりや展開を記述することなど、この研究領域における資料としての談話は多岐に及んでいる。また、どのような言葉を規範とするかに関する言語政策の研究もこの領域に入るであろう。

(5) 教育学

学習の手段としてのことば、あるいは習得目標としてのことばに関連する教育学の領域では、発達、教育、学習の諸側面にわたって談話の観察・記述が行われる。ことばのやりとりを通じてそれらの側面がいかに関係するかを見て行こうとするのである。言語教育では到達目標となることばの「理想的な」かたちだけでなく、それに至る中間言語の研究も活発に行われている。

(6) 認知科学

ことばに反映される人間の知に注目する分野は認知科学と総称されるが、これ自体が学際的分野である。談話研究の領域としては特に談話「理解」のしくみや、短期・長期記憶のあり方、パターン認知の方策、言語習得のメカニズム等での貢献が大きい。スクリプト・スキーマなどのキーワードに代表される談話のメタ認知の概念は、他の領域の研究者に対する影響も大きい。

(7) 情報工学

情報工学の領域のうち、人口知能や機械翻訳は人間の行う談話の展開をコンピュータの2値的論理形式のなかにシミュレーション的に代表させるものである。また、2値論理から逸脱する現象、たとえば結束性、ダイクシス、多義表現等の現象、の処理のしかたは談話研究に新しい知見をもたらしている。

(8) 医学

言語関連を研究対象とする医学研究のうち、ことばを生み出す脳の構造とその働き、あるいはその障害に注目した分野は談話研究と密接な関わりをもつ。特に言語障害の研究は何が正常な働きであるかを示唆するものだという。

3 談話の記述

談話のいとなみは常に多重構造である。音、あるいは文字のつらなりはそれ自体は時空間を線状に流れるものであるが、それを把握するには多次元の記述が必要となる。それを資料として活用するためには、記述の方法が非常に重要な意味を持つ。ビデオ等によって全体を視聴覚的に捉える方法は近年盛んに行われている。しかし研究対象として見るためには単に見たまま聞いたままでは不十分であり、それを項目あるいは変数によって分析することが必要となる。工夫はいろいろされているが、いずれもオーケストラの楽譜のように複線あるいは複複線の記述が必要になるわけである。

4 談話研究のめざすところ

今年度発表会のテーマは「談話研究のめざすところ」となっている。それはとりもなおさず発表者達が談話研究を一つの過程あるいは手段として認識していることを意味する。研究領域の違いを越えて、大きく次のような目標があろうかと思われる。

(1) ことばのいとなみの全体を捉えること

ある時空間での言語によるコミュニケーション活動を多次元の変数で同時に捉えることは談話の総合的記述を可能にする。それ自体が目標であることも十分可能である。記述のために一般的に次のような次元が考えられるであろう。

* ヴァーバル(verbal)な次元：音声・音韻・韻律も含む

* ノン・ヴァーバル(non-verbal)な次元：身振り手振りだけでなく表情、姿勢、声、沈黙の時間等も含む

* 機能的次元：発話の動機、意図、前提、背景、効果、顛末も含む

* 認知的次元：スクリプト、文脈、推論のメカニズムも含む

* 社会学的次元：話し手・聞き手とその属性、談話をとりまく状況も含む

* 心理的次元：談話のイメージ、人間関係への影響も含む

* 感情的次元：談話参加者がどう感じているか、などの側面も含む

(2) 同一言語内・多言語・多文化間コミュニケーションを円滑に行うための方策を策定すること

言語社会内部の、あるいは言語・文化的差異による様々なコミュニケーションのいとなみの実態を捉え、それらギャップを埋めるべき方策を策定することは、自分自身のコミュニケーション・パターンを自覚することから始まる。次のような領域での研究成果がそれに寄与すると思われる。

* 社会言語学：実態の把握と変数・因子の分析

* 異文化間コミュニケーション学：言語接触、文化摩擦の解明

* 対照語用論(contrastive pragmatics)：二つ以上の言語について語用論の手法を用いて対照研究を行うこと

*バイリンガリズム(bilingualism)：2言語併用のメカニズムを探り、言語習得の過程を理解すること

*多文化主義(multi-culturalism)：母語・母文化の保持と言語運用の切り替えのメカニズムの策定

*機械翻訳：ことばのいとなみのあらゆる側面の翻訳が可能になること

*第二言語教育：教育・習得の過程のモデル化と習得をはばむ要因の解明

(3) コミュニケーション障害の防止と効果的治療

伝達活動が円滑に行われるためには、その障害の解明がされなければならない。以下のような分野での研究の発展は確実にその一助となるであろう。

*言語習得：第一言語、第二言語の習得がどのように行われるかの解明

*言語障害：言語能力がどの様にして失われ、どのようにして回復するかの研究

*社会言語学的分析：特に対人関係に関するギャップの研究

*認知心理学：言語発達の過程、記憶の喪失とその再生などを含む